

Title	介護と生と死の教育：介護福祉士養成校のターミナルケア教育
Author(s)	根本, 秀美
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.18-No.2, 2008.9 : 10-10
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4774
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

介護と生と死の教育

—介護福祉士養成校のターミナルケア教育—

根本 秀美

介護福祉士養成校のターミナルケア教育は、体系化されておらずまだ思考錯誤の状態である。

高橋¹⁾の介護福祉士養成校の全国調査(175校)報告では、「すべての養成校でターミナルケア教育は行われており、主な教科は介護技術や介護概論などである。授業で重点的に教えている内容は、心理面の援助、学生の死生観・人生観を深める、身体面の援助、介護福祉士としての基本姿勢である。しかし教員の授業に対する満足度は、まあ満足と満足をあわせて26%、あまり満足をしていないと不満は40%である。不満の理由は、授業の時間数が少なく体系化されていない、また授業の困難性を感じている」などである。これは、教科書には医療の経験からのターミナルケアの内容が多く介護独自のものが少ない、まだ研究や議論も少ないため、何をどのように教えるかが整備されていないためと思われる。また「具体的に実体験の少ない学生にターミナル期にある利用者をイメージさせることは、実体験が伴わないと理解しにくく学内の授業では限界である」との報告からは、実習での教育の重要性が考えられる。しかし本校を例に考えても実習の目的は、「利用者にその人らしい尊厳のある生活の援助ができる」ことが主になっており、目的や目標にはターミナルケアの項目はなく位置づけは弱いと考

えられる。また実際の授業内容の研究報告は看護を参考にしたものはあるが、介護が特徴とする認知症や高齢者のターミナルケアは少ない。

現在、介護福祉施設利用の高齢者は生活援助を受けながら除々に死に向かって生きており特別養護老人ホームなどは終の棲家となる。

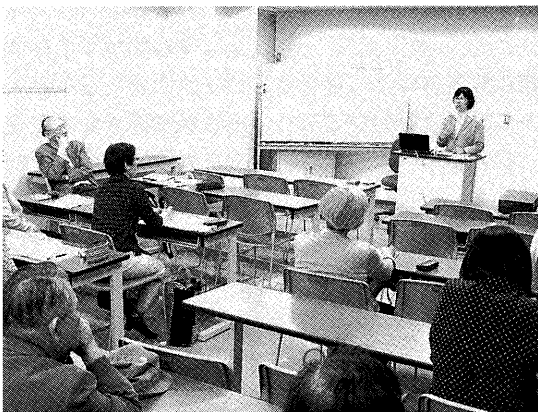
そのような生活の場での介護のターミナルケアも模索中である。たとえば医療ではターミナル期を6ヶ月ということがあるが、介護福祉施設などの高齢者のターミナル期の判定は難しく、食事摂取困難や体重やBMI(体格指数)などを指標にしており、判定してからも一進一退を続け2年以上にもなることがあるなど難しい。また生活の場であることから仏壇や神棚などの設備があり、入居者は日常生活のなかで朝夕のお参り(宗教行動)をしたり、ターミナル期には他の入居者などとお別れをしている。死亡した時は施設側でお別れの機会をつくったり、葬儀をしたり、死は自然なものとしてとらえ死を隠さない状況もある。

介護福祉士養成校のターミナルケア教育は、介護現場での事例検討や研究成果に学びながら、前述の介護現場の状況をふまえて行っていく必要がある。特に生活援助・認知症・自然で尊厳ある死・日本人の死生観や儀礼等・ケアとケアの姿勢などを教育内容とし、授業のみでなく実習も位置づけて行うことが重要であると考え。時間数の不足等などは正規の授業以外に学習会や見学研修等を行い多方面からの教育内容の充実をはかることも大切と思われる。

1) 高橋美岐子 介護福祉士養成施設における「ターミナルケア教育」の現状と課題 介護福祉教育 2003

(ねもと・ひでみ 信州短期大学ライフマネジメント学科准教授)

(2008年5月10日、新都心ビジネス交流プラザ4階聖学院教室)



講演の様子